

## 「尼將軍」北条政子とは？

東京大学史料編纂所 准教授 遠藤 珠紀 (えんどう・たまき)

北条政子(1157～1225年)といえば、鎌倉幕府初代將軍源頼朝の妻で、大きな影響力を発揮した「尼將軍」のイメージで知られている(ただし同時代の呼称ではない)。昨年は没後800年の年だった。本稿では、政子の権力の在り方を追っていく。まず略歴を紹介しよう。政子は伊豆国の北条時政の娘で、流人だった頼朝の妻となった。頼朝の死後は、息子の2代將軍頼朝・3代実朝を後見した。さらに二人が亡くなると、京都から藤原(九条)頼経を次期將軍として迎え、幕府を担った。承久の乱の折に、御家人たちに頼朝の恩を説き、鼓舞した逸話はよく知られている。その後も弟の執権北条義時と共に政治を執った。義時死後、甥の北条泰時が執権の地位を固める手助けをし、翌年死去した。鎌倉幕府の基礎固めに大きな功績を残した人物である。

では当時、政子はどのように評価されていたのだろうか。鎌倉幕府が編纂した『吾妻鏡』は、政子が「天下を執行なさった」と記す。また『吾妻鏡』巻首の「関東將軍次第」では、実朝の死後、政子が死去するまでの7年を政子の治世とする。『御成敗式目』やその後の幕府法でも「頼朝以後三代の將軍ならびに政子の御時」の決定は変更しない、との条文がみえる。生家北条家が執権として権力を握っていたことも影響しているだろうが、これらからは政子が、鎌倉時代には將軍と同様に位置付けられていたと推測される。まさに「尼將軍」といえよう。

だが、なぜ「尼」將軍なのだろうか。政子の役割は、時期により異なる。頼朝生前は、靜御前(頼朝の弟義経の妻)を擁護するなど、主に一族の最上位の女性として、一族の女性や子どもに気を配っていた。政治的手腕を振るうようになったのは、頼朝の死後、出家して尼になってからである。特に幼い4代頼経の時期には、政子が御簾の内です政治判断をすると定められた。

これは政子が「後家尼」の立場にあったことによる。「後家」という言葉には、現代ではネガティブなイメージを感じるかもしれない。しかし中世には、夫亡き後、再婚せず尼となって家にとどまった「後家尼」は、夫の代行者として財産の管理をし、後継者が幼い場合には、成人まで家長の役割を果たす存在だった。政子も頼朝の後家で、將軍の母という立場から、幕政に関与したのである。

こうした「後家尼」の存在は、政子以外にも、中世を通して各階層でみられた。夫と死別した女性は「後家尼」としてその家を支えたり、あるいはその家を離れて再婚したりしていた。

では政子は男性の將軍と同等の権力を持っていたのかというと、そうともいえない。政子の地位は、あくまで「後家尼」という私的立場に由来するもので、征夷大將軍などの公的な官職には就けなかった。頼経に代わって政治を担っている時も、ハレの儀式の場には、政子ではなく頼経が臨んだ。公の將軍ではなかったのである。

また政子が「政子」の名を得たのは数え62歳の時で、すでに尼となっていた。実は、当時女性の多くは正式な名を持たず、愛称や立場による名で呼ばれていた。政子であれば、長女を意味する大姫、あるいは平氏女(平氏は北条家の姓)、御台所、尼御台所などと呼ばれたであろう。そうした中、1218(建保6)年に政子は京都に赴き、將軍実朝の後継者について朝廷と折衝した。この時に従三位の位階を与えられ、その書類に必要なために父時政の一字を取り「平政子」となったのである。しかし以後も実際に政子の名で呼ばれることはなかった。

このように政子は政治的手腕を振るった。一方で男性の將軍に比べてその立場には限界もあった。さらに、江戸時代になるとだんだん、あるべき「女の道」が重んじられ、女性の政治関与が否定的に捉えられるようになる。それに伴い政子の評価も下がり、「悪女」のイメージさえ見られるようになった。その時代時代の中での政子の評価を位置付けていく必要があるだろう。



写真 北条政子像(横浜市南区乗蓮寺所蔵) 横浜市歴史博物館画像提供  
乗蓮寺は北条政子開基の寺院で、本像は政子が鏡を見ながら自刻したものと伝わる。